

2. 富士川英郎と日本医史学

富士川義之

元東京大学文学部教授／英文学者

富士川英郎は父である。従って私は富士川游の孫に当たる。祖父も父も学者であった家に嫡男として生まれるという血筋を引いたせいもあってか、私もまた専門は違うが、これまで学者としての人生を歩んで来た。私は子供の頃から折にふれて祖父への敬慕の念を漏らす父親のもとで育ったから、むろん、祖父への関心はある程度持っていた。しかしながら、若年の頃には、そうした関心を広げたり深めたりする方向に進むことはなく、ようやく医史学者としての富士川游の卓越した業績に幾らか関心が向くようになったのは近年のことである。とりわけ数年前から執筆中の富士川英郎の評伝の仕事がきっかけでまことに遅まきながらぼつぼつ勉強し始めているところである。そんな不肖の孫であるから、とにもかくにも英郎が游をどうとらえているか、どのように記述しているかをまず探ってみるしかない。以下は、その中間報告とでもいうべき発表である。

富士川英郎は幼い頃からいわば医史学的な雰囲気の中に浸っていたと、後年回想している。鎌倉の游の家の客間には、しばしば神農やヒポクラテスや吉益東洞などの肖像画がかけられており、また秋には、いつも蔵書の虫干しの手伝いをさせられて、『素問識』や『漢蘭酒話』などの古医書の名を、その内容も知らずに、いつの間にか覚えこんでしまったという。このような幼い頃の経験があって成人後、とりわけ昭和15年11月における游の没後、游の著作に親しむようになり、医学史の領域のうちで、儒者と医者との関係、パトグラフィ（英郎はこれを「病志」と訳すことを好む）、なかんずく疾病史に興味を抱くようになる。游の『日本疾病史』はむろんのこと、土肥慶蔵『世界蠱毒史』や山下政三『脚氣の歴史』や山本俊一

『日本コレラ史』などを愛読したという。

英郎はその晩年に長大な伝記『菅茶山』を完成させたが、菅茶山とは江戸後期の高名な漢詩人であることは言うまでもなからう。この茶山は京都で和田東郭に医学を学び、郷里の備後国神辺で暫く医業を行っていたせいもあって、その交友のうちにかなり多くの医者がいた。その主なる者として、京都の橘南谿、小石元俊、元端、新宮涼庭、江戸の大槻磐水、磐里、桂川甫周、伊澤蘭軒、土生玄碩等を挙げている。それゆえ菅茶山研究には、儒者と医者との関係を究めることが不可欠であった。また、病志では、「頼山陽の病志」を執筆して、これを『日本醫史學雑誌』に掲載したこともある。

游の医史学との関連で特記すべきことの一つは、テリアカ（底野迦）への関心である。ギリシアで創製され、やがてアラビアからシルクロードを経て唐時代の中国に入り、奈良時代の日本の医書にも記載されているこの靈薬のことを、英郎が最初に知ったのは、游の短い紹介文「底野迦」（『富士川游著作集4』に収録）を通じてであった。このテリアカのことは、森鷗外の史伝『北条霞亭』にも記載されており、鷗外作品の熱心な愛読者であった英郎は、20代終り頃に、この史伝を初めて読んだときから注目している。鷗外は「テリアカは希臘語テリアコンの転で、解毒蜜剤である」と書いているが、このテリアカについては霞亭が弟碧山に与えた手紙のなかで言及されており、「霞亭はこのテリアカの製法を誰から聞いたのか、いずれにしても右の手紙の一節は、江戸時代の末期に医薬としてのテリアカがかなりひろく用いられていたことを暗示しているようで興味深い」と、「底野迦」（『書物と詩の世界』所収、玉川大

学出版部1978)のなかで述べている。

ついでながら、英郎は昭和34年に勤務先である東京大学大学院の比較文学・比較文化課程の研究室で、当時非常勤講師として出講していたイスラム学者の前嶋信次氏(慶應大学教授)と初めて出会っているが、その折の雑談のなかで、英郎がテリアカについて触れたことが大きなきっかけとなって、前嶋氏が「テリアカ考」という研究論文を完成させたという。この論文は同氏の大著『東西文化交流の諸相』(慶應義塾大学出版会1971)に収められている。

英郎は『西東詩話』(玉川大学出版部1974)所収の「古方家と蘭学」という、遊の医史学に深く

学んだ論考のなかで、日本で最初に人体解剖を行った山脇東洋を「たくましい実証精神と不屈の自信がきらめいている」と評している。「事物の観察を先きにし、それに基づいて立言すれば、平凡な人間も真理を語るができる」。これが「学者の覚悟」であると言う。

このように述べるとき、英郎は遊の存在をも同時にその脳裡に思い浮かべていたかもしれない。「たくましい実証精神と不屈の自信がきらめいている」というのは、まさに遊の医史学研究についても言い得ることであるからだ。英郎はそうした遊の学者としての姿勢に若年の頃より深く打たれるところがあったのである。